



農村生活のすすめ

第4回：「まちづくり」の思想についてのすこし長いコラム

調査研究部 川井 真

目次

- | | |
|---------------|------------------|
| 1. 少年時代を振り返る | 5. 内発的発展論の潮流 |
| 2. 生きるための選択 | 6. 「まちづくり」の世紀 |
| 3. 「地域」へのまなざし | 7. アイデンティティが宿る地域 |
| 4. 地域主義という思想 | |

1. 少年時代を振り返る

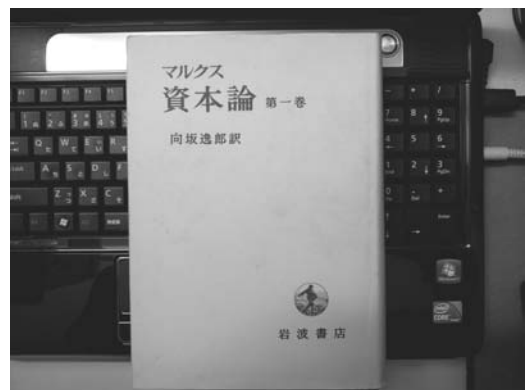
思いおこせば、ローマ・クラブによる『成長の限界』がマサチューセッツ工科大学のD. H. メドウズらの研究チームによって発表されたのは1972年であった。世界人口や食糧の生産、資源消費や環境汚染など、地球規模で相互に依存しあう複雑な連鎖の構造を人類の経済活動との関連において分析し、このまま人口が増大して経済が成長を続けたとしたら未来はどうなるのか、それを「ワールド3」というコンピュータ・モデルを用いてシミュレートした壮大な研究報告書である。しかし結論としては、「このままの推移をたどれば今後100年以内に地球上での成長は限界に達する」というものであったがゆえに、『成長の限界』が示した研究結果は世界を震撼させたのである。

この当時、わたしはマルクスの『資本論』と格闘していたので、『成長の限界』という書物との出会いは初版の発行から4、5年は経過していたと思う。書店の店頭で立ち読みしたのは、たしか高校に入学してからのことだったように記憶している。そこで余談になる

が、この『資本論』との出会いも少し説明しておく必要があるようだ。この書物は自分が興味をもって購入したものではない。小学校5年の冬、クリスマスの数日前であったと思うが——悩み多き小学生だったわたしに——ある人物がプレゼントしてくれたものである。マルクス『資本論』（岩波書店）向坂逸郎訳の第一巻であった。

当初は意味不明な記号が羅列されている奇怪な書物という印象で、数行ほど読み進んでは深い眠りについていたが、半年ほど経過した頃から光景が浮かんでくるようになった。

マルクスの『資本論』第一巻



しかし、なんとも言い表しがたい絶望感とともに読了したのは——それから約2年後の——中学校2年の夏休み前であった。少なからず未来に希望を抱いていたナイーブな少年にとって、この書物は少し刺激が強すぎたようだ。

わたしが中学時代を過ごした1973年からの3年間は、日本を取り巻く情勢も不安定で騒がしい時代であった。第4次中東戦争勃発を契機にはじまった第一次オイルショックは、エネルギー資源の大半を輸入に依存していた日本経済を大きく動揺させることになり、商社や石油会社は原油量を確保するために狂奔した。また各地でトイレトーパーや洗剤などを買い占める、衝動的なモノ不足パニックが起こるなど、人心も動揺していた。その後まもなく戦後の高度経済成長の終焉がささやかれるようになったのである。このような時代を過ごしながら、資本主義経済というものが人類にとってはベターな選択なのであろう、とは思いながらも、資本主義というシステムの内部には、なにやら邪悪なものが紛れ込んでいるような、そんな言語化できない微妙な感覚を払拭しきれずにいたので、『成長の限界』との出会いはあまりにも衝撃的であった。未来に向けて維持可能な社会を作っていくのはわたしたちの責任であり、そのためにはグローバル化していく市場経済になんらかの介入をしなければならないのではないか、という素朴な疑問を抱えるようになったのもこの頃である。

2. 生きるための選択

『成長の限界』の発表から20年が経過した1992年——これはローマ・クラブからの委託研究ではないが——同じ研究グループによって『限界を超えて～生きるための選択』が著

された。この本の“はしがき”には驚くべき事実が記されている。「1971年にわれわれは、人間が消費する原料やエネルギーの物理的限界が訪れるのは、数十年後だという結論を出した。ところが、91年に再びデータやコンピュータ・モデル、そして自らの経験を考察した結果、技術改良や環境意識の高揚、環境政策の強化などが見られるにもかかわらず、多くの資源や汚染のフローがすでに持続可能性の限界を超えてしまっていることがわかった」というのである。

“Club of Rome”による『成長の限界』



なんとも絶望的な書き出しではあるが、ただ、第8章の“行き過ぎからの引き返し”には抽象的で情緒的ではあるもののきわめて意義深いメッセージが織り込まれている。この章では、持続可能な社会への移行に求められるものとして、“ビジョンを描くこと”、“ネットワークづくり”、“真実を語ること”、“学ぶこと”、“愛すること”、というテーマに沿って具体的な取り組みや意識変革の道すじが示されている。

なかでも印象的だった部分を抽出すると、まず“ネットワークづくり”においては、「ネットワークは、その定義からして、非階層的

である。対等の人びとが交流する網の目である。人びとを結びつけているのは、力でも義務でもなく、物質的インセンティブでも社会的契約でもない。それは共有された価値観であり、一人の力ではできない仕事も力を合わせれば成し遂げられるという認識である」とあり、また「地域ネットワークの一つの役割は、産業革命後長く失われてきた、共同体意識や場所とのつながり意識を回復するうえでの一助となることだろう」ともある。“学ぶこと”においては、「持続可能な世界の実現に向けて行うべきことは数多くある。新たな農法を実践する必要もあれば、新種のビジネスをスタートさせ、古い形態のビジネスを再構築してスループットを減少させる必要もある。土地の回復、公園の保護、エネルギー・システムの転換、そして国際協定の締結なども欠かせない」として、社会教育の重要性とプラグマティックな行動主義を提唱する。さらに“愛すること”では、「愛については、その言葉のもつ最もロマンティックでありふれた意味以外では語る事が許されていない」としながら、「持続可能性革命は、何よりも、人間の最も悪い部分ではなく、最も良い部分が表に現われ育てられることを可能にする社会的変革でなければならない」としている。

3. 「地域」へのまなざし

このような認識と軌道修正の方法についてはまったく同感であった。自身の考えを追認してもらったような満足感と、まるで迷路から抜け出したときのような、ホッとした感覚に包まれたことを憶えている。グローバル資本主義時代を越えて、そこに新たな地平を拓くためには「地域」というものへのまなざしが必要だ、という漠然とした意識に輪郭を与

えてくれる言葉がそこにはあった。いまはまだ、外へ外へと拡散する意識を内部（生活・生命・自然の領域）に引き戻す操作が必要なのであり、そのためにも“開くためにこそまずは閉じなければならぬ”という確信をもつに至ったのである。なるほど、くらしの場である「わたしのまち」すなわち生活圏の機能を守り、更新し、あるいは改良し、そして発展させていくことは、グローバルに門戸を開く際には欠くことのできないソーシャル・リスクマネジメントであろうし、それなくしては大海を漂流してしまうことにもなる。ただ、この頃はすでに、グローバルな経済システムが日本全体を——経済のみならず社会そのものを——呑み込んでいくようなダイナミックな変化に晒されていた。バブルの狂宴は終わったが、世間には宴のあとのような牧歌的な雰囲気漂い、酔いが醒めた人たちは次なる成長と拡大を求めて——まるで強迫観念に囚われているかのように——外へ外へと奔走しはじめるのである。

4. 地域主義という思想

一方、1960年代後半から70年代にかけて、日本国内では“地域主義”という思想が芽生えはじめていた。わたしが意識したのは17歳の頃であるが、法律専門誌（判例紹介誌）の『ジュリスト』増刊総合特集に「全国まちづくり集覧」が取り上げられたことがあり、この雑誌を書店の店頭で流し読みをしているとき、当時は東京大学の教授であった玉野井芳郎氏の「まちづくりの思想としての地域主義」という論文に惹きつけられたのがきっかけであった。その翌年には、『地域主義～新しい思潮への理論と実践の試み』という書物が玉野井氏を中心とする執筆陣によって著された。

『ジュリスト』でも特集の組まれた地域主義



玉野井氏によると、地域主義は「一定の地域住民が、その地域の風土的個性を背景に、その地域の共同体に対して一体感をもち、地域の行政的・経済的自立と文化的独立性を追求する」としながら、「地域の住民の自発性と実行力によって地域の個性を生かしきる産業と文化を内発的につくりあげて、「下から上へ」の方向を打ち出してゆく」ものと説明している。

また地域主義の視座から“まちづくり”についても言及している。玉野井氏は全国各地の取り組みを鳥瞰しながら“まちづくり”というとき、二つの事柄が思い浮かぶ」と語り、そのうえで「一つは「まち」という土着の日本語が用いられていることだ。……日本の自然と風土の中に生まれたことばが地域主義の構築に関して用いられるのは、問題の深化という面からも当然の用語法と思われる」との見解を示し、くわえて「もう一つは、大都市というより、地方の中小都市が主としてとりあげられていることだ。たとえば東京都のような大都市についても、……東は江戸川区から西は奥多摩、北は清瀬市から南は町田市までの、区や市のレベルで浮かびあがってくるさまざまな「まち」であろう」として、地域

主義における地域が、一般に社会の基層単位として捉えられている市区町村を指すこと——もちろん単純に行政区画を意味するものではないが——を示唆している。そして「まち」の概念については、抽象的ではあるが「明らかに「わたしのまち」、「わたしのむら」という実感でとらえられる生活の小宇宙である」という表現を用いることで、地域という空間に包摂されて生きる人たちが間主観的に共有する世界をみごとに描出している。

5. 内発的発展論の潮流

このような地域主義研究と重なり合うように、1970年代から80年代には“内発的発展論”を唱える研究者たちが現れ一つの思想的潮流をつくり出していた。社会学者の鶴見和子氏は、アメリカ社会学と日本民俗学の研究、さらには南方熊楠に関する研究などから得た知見を融合して内発的発展論の思想的基盤を形成していった。なかでもアメリカの社会学者タルコット・パーソンズによる“内発型発展”と“外来型発展”の類型化から多くの示唆を得て、独自の内発的発展論を展開したのである。鶴見氏の内発的発展論の概念は、「目標において人類共通であり、目標達成への経路と創出すべき社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上のすべての人々および集団が、衣食住の基本的要求を充足し人間としての可能性を十全に発現できる、条件をつくり出すことである。それは、現存の国内および国際間の格差を生み出す構造を変革することを意味する。そこへ至る道すじと、そのような目標を実現するであろう社会のすがたと、人々の生活のスタイルとは、それぞれの社会および地域の人々および集団によって、固有の自然環

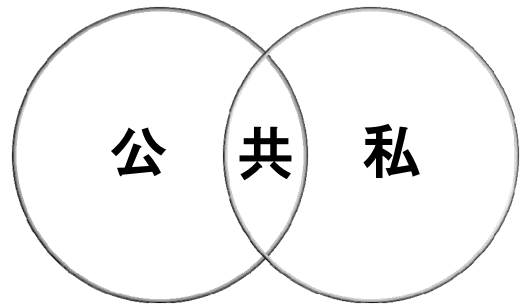
境に適合し、文化遺産にもとづき、歴史的条件にしたがって、外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出される」という文脈に象徴的である。

また経済学者（環境経済学）の宮本憲一氏は、鶴見氏が内発的発展の原動力を「キー・パースンとしての小さき民」すなわち“個人”に求めたのに対し、その役割を“組織”に託して以下のように述べている。内発的発展とは「地域の企業・組合などの団体や個人が自発的な学習により計画をたて、自主的な技術開発をもとにして、地域の環境を保全しつつ資源を合理的に利用し、域内経済循環を重視し、その地域の文化・教育に根ざした経済発展をしながら、地方自治体と住民組織のパートナーシップで住民福祉を向上させる地域発展」であるとしていることから、宮本氏のそれは産業論的な視座に立った地域政策としての色彩が濃い。特徴的なのは、地域内産業連関によって内的な経済循環を生み出し、社会的剰余を福祉や教育、そして文化的な活動に配分する、という点であろう。

6. 「まちづくり」の世紀

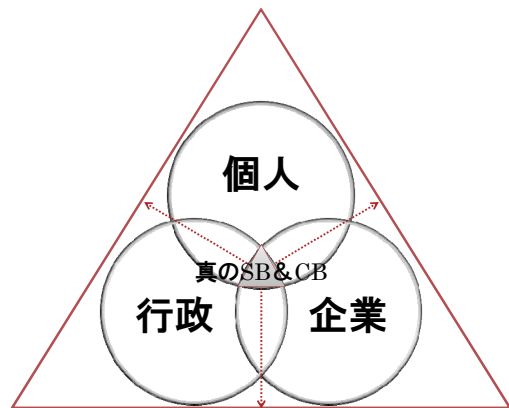
いずれにしても、わたしは日本の21世紀は“まちづくり”の世紀であるべきだ、と考えている。不可逆的な人口減少を伴う高齢社会であるからこそ、社会の基層単位である「まち」や「むら」の機能を再考・再生して生活の内実を豊かにしていく取り組みが求められているのだと思う。この“まちづくり”の主役は「公」でもなければ「私」でもない「共」という領域を感覚的に捉えている人たちが担うことになるだろう。

「まち」のシステムは「共」が担う



彼らが仕掛けるのはソーシャル・ビジネス（SB）やコミュニティ・ビジネス（CB）と呼ばれるもので、現存する地域資源（ひとや組織）を網の目のように結びつけながら、人類共通の目標を達成するために「まち」をデザインしていくのである。

「まちづくり」と結びの原理



そこにあるのは主として生命系と調和する——食・エネルギー・ケアなどを核に展開される——産業であろう。そのためにも、今日まで地域主義や内発的発展論の研究が積み上げてきた知見を現実の地域計画や“まちづくり”の実践過程に組み込んでいくこと、そして個人や団体が主体的に地域活動に参加できる土壌づくりと、地域におけるプラグマティ

ックなアクション・リサーチの実践が求められているように思う。

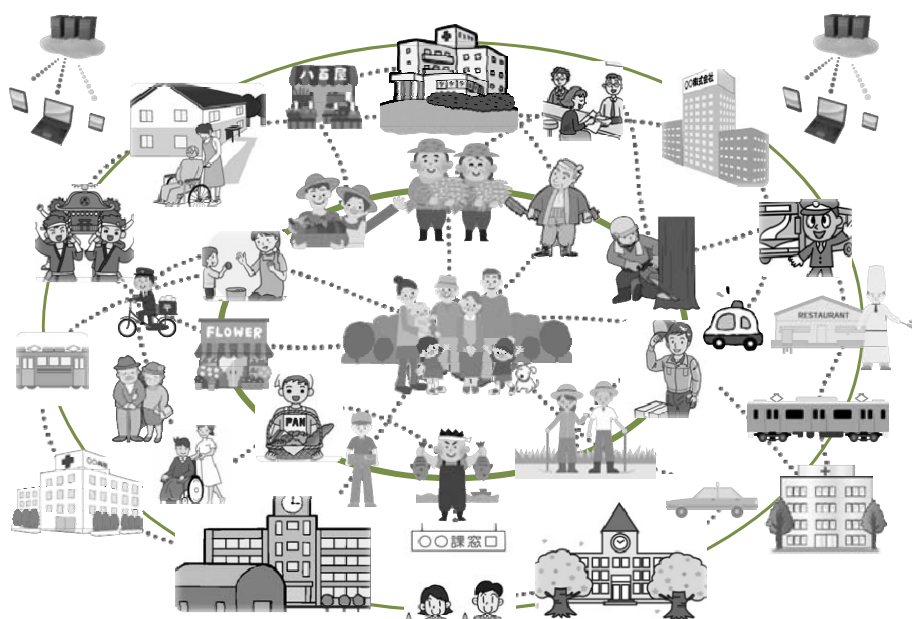
7. アイデンティティが宿る地域

開くことを意識して閉ざされた空間は——過去に存在したような——“村社会”を形成することはない。なぜなら自我は解放されているからである。プラグマティズムの社会心理学者ジョージ・ハーバート・ミードは二種類の自我すなわち主我（I）と客我（me）を研究したことで知られるが、彼の唱える“自我の社会説”は「人間の自我を映し出すのは他者であり、したがって他者を鏡として自我を知ることができる」というもので、他者の視線が自我の形成に深くかかわっていることを明らかにしている（他者の役割取得）。したがって意識的に閉ざされた空間（まち）は、そこに住まう個人（わたし）にとって意味のある他者を、外部世界に無数に作り出すことにもなるのである。たしかに「まち」（社

会）も「わたし」（意識）も閉鎖的でオートポイエーシス的なシステムであるが、その地域に住まう「わたし」たちが変われば「まち」も変わるのであり（構造的カップリング）、その意味において21世紀は「わたしのまち」に変革の機会を提供している。

そこで最後に、地域主義と内発的発展論にもとづく“まちづくり”の思想を整理しておきたい。そもそも“まちづくり”は住民参加型の取り組みであり、住民自身の生活の延長線上にある活動である。そしてそれは「わたしのまち」という自信と誇りに裏付けられたものでなければならない。もっとも大切なことは、それが住民一人ひとりの生活の内実を豊かにするものである、という暗黙の共通認識である。そのためには地域における産学官民のパートナーシップと連携が推進され、その活動は地域に住まうすべての住民の自立と主体性を重視するものでなければならない、ということであろう。

来たるべき「まち」の構想



(参考文献)

- ・ D. H. メドウズ/D. L. メドウズほか 著、大来佐武郎 訳 (1972) 『成長の限界』ダイヤモンド社
- ・ D. H. メドウズ/D. L. メドウズほか 著、松橋隆治・村井昌子 訳、茅陽一 監訳 (1992) 『限界を超えて——生きるための選択』ダイヤモンド社
- ・ 玉野井芳郎ほか (1978) 『地域主義——新しい思潮への理論と実践の試み』学陽書房
- ・ 玉野井芳郎ほか (1984) 『いのちと“農”の論理——都市化と産業化を超えて』学陽書房
- ・ 宮本憲一 (2000) 『日本社会の可能性——維持可能な社会へ』岩波書店
- ・ 宮本憲一 (1989) 『環境経済学』岩波書店
- ・ 鶴見和子・川田侃 編 (1989) 『内発的発展論』東京大学出版会
- ・ 鶴見和子 (1996) 『内発的発展論の展開』筑摩書房
- ・ 有斐閣 (1977) 「ジュリスト増刊総合特集 全国まちづくり集覧」